昭和37年10月5日　発行

真赤な子犬

著作者　日影丈吉
発行者　矢貴東司
印刷者　小泉輝章

発行所　株式会社　桃源社
東京都中央区日本橋蛎殻町1—12
電話（671）4001～2番
振替東京 64351 番

¥ 260.

落丁・乱丁の節はお取替え致します。　1962©

真赤な子犬

日影丈吉

桃源社　刊

目次

A 危険な贈物……七
B 凝りに凝つた呆気ない死……一八
C 国務大臣秘書の異常な経験……三〇
D 死の利用価値……四一
E 読者だけが知つている……五一
F 本格物の退屈な部分……六一
G 美食学的な死の前後……六八
H お化け犬……七八
I 家の中の山登り……八六
J 推理の道標は曲つていた……九三
K 高雅な死と卑俗な蘇生……一〇二

L 時の人は静かに寝てもいられない……一〇九
M 手に負えぬ人々……一一八
N 推理の表と裏……一二六
O のんきな影武者……一三六
P 小犬の咀嚼力の問題……一四
Q 探偵小説ファンは推理が上手……一五五
R 眼のよるところに玉……一六七
S 雪の上の死体とビヤ樽……一七七
T ダブル犯人説……一八五
U 二つの事件はどこでつながっているか？……一九一
V 緋色の研究……一九九
W 人間的関係……二一一
X 綜合と収約……二二二
Y 殺人心理学……二三六
Z 結局どうなる？……二五〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

装幀　三井永一

真赤な子犬

・今年は赤（レッド・カラー）が流行

（59年立春の日の朝刊紙にあらわれた風邪薬の広告見出）

A　危険な贈物

十二月二十三日、午後五時五十分。

ゴチック式の窓の外に、さつきまで空をひび割れたように見せていた枯木の梢も、もうとつぷり暮れてしまつた。暖冬とはいえ、この季節のこの時刻に、まだカーテンも引かぬ窓ガラスの広い面には、旧式な煖房装置のぬくもりでずつしりかいた汗が、ときおり夜空をバックに金砂子のように光る。

レコードが鳴つていた。明日はクリスマス・イヴ。だが、『聖しこの夜』でも『ジングルベル』でもない。スイング『蜜蜂といつしよにブンブン騒ごう』

片隅に立つている、銀紙の星やモールで飾られたクリスマス・ツリーが、ぴつたり所を得たような、品川長者丸、三渡(みわた)本邸の、ひろびろした古風な応接間である。曲に合わせて細かく身をふるわせながら、せせり歩いている娘は、このどつしりした邸宅に、似合うよ

うな似合わないような存在だ。

ジャクリース・ササールの『芽生え』を見てから、すつかりお気に召して作らせた、バレーの稽古着のようにぴつたり肌に貼りついて、からだの線を隈なく見せるネグリジエを着ている。真黒なはだかの妖精みたいなこの娘は、国務大臣、三渡淳造の一人娘。歌手の三渡真規である。

歌手といつても色とりどりで、オペラ歌手、リード歌手、流行歌手、シャンソン歌手、ポルテニア歌手、ロカビリー歌手。日本ほど歌手の種類の多い国も珍らしく、三渡真規はそのうちのどれに当るのか？　最近ひらいたリサイタルで発表したのは、シャンソンとロカビリーだが、今後はどんな歌を披露するかわからない。

彼女は無限の可能性を内包している。要するに未知数の天才歌手だ。新らしいものには、なんでもはツと飛びつく、先物買いで飽きつぽい時勢の脚光を浴びて、おどり出したばかりの彼女は、二日酔いの批評家が頭痛と天才のヒラメキを混同して褒めあげた、新人である。

事実、天才という誇大な表現が、新聞の批評に恥ずかしげもなく、やたら飛び出したのは、この娘の氏育ちと、ステージに立つた彼女の、一種とつぴようしもない個性に眩惑さ

れたからであろう。

二十四才、身長一メートル六〇、体重五一キロ。伸びきった体軀の上に、十二才の悧巧そうな少女の顔が載っている。七才の童女が風邪をひいたような声で、なんの技巧も感じさせず、心の底から囁きかけるように歌うシャンソン。かと思えば、欲情と悲哀のねり火薬が爆発したように、四肢をおっぴろげて喚きたてるロック。作詞作曲も自分でやり、まだうまいとはいえないが、何かある。だいいち、ギターを抱えて、客席をのぞきこむような姿勢で、舞台の袖から忍び足で出て来た最初のステージに、ある批評家は思わずウーンと唸ったと、正直に書いている。

そういう、最初の印象から人をつかまえてしまうような魅力は、彼女の天性のものらしいと、ふだんの彼女を知らず、ステージを見ただけで、わけ知り顔に頷く者もあるのは、真規の父、三渡淳造の人間的魅力ということが、よく新聞などで、いわれているからだろう。

三渡淳造（みわたじゅんぞう）という、戦後の政界に打って出て、急速に大物にふくれあがった人物が、どんな政策を持っているか、誰も考えたものはない。ただ、かれが長身肥大の押し出しで、そのいつも眠っているような大きな顔を、党内いざこざの場などに持って行くと、現保守党

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

主流派はそれだけで安定を感じ、力づけられるという。頭がよく廻つて機智に富んだ、魅力的人物だともいわれているし、一方からは政治的愚鈍の象徴のように見做されていた。

だが、この邸の主人は目下外出中だから、いまこの豪奢な応接間の中を、ステップを踏みながらせせり歩いている大臣令嬢の売出し歌手に、もつぱら目をむけてみよう。

全身の曲線を隈なく露出したゲンドリナ・スタイルで、スイングに合わせてひよこりひよこり歩きまわつている真規は、いたつて無邪気。無軌道型の売出し歌手というよりは、素朴で風がわりな、ただのブルジョア娘である。

戦後のアプレ型でもなく、その後にあらわれたカモフラ型とも違う。天真ランマン、純粋無垢で、気がむいたら、首くくりの足でも引つぱりそうなお嬢さんである。彼女が何を企らんでいるかだけは、茫洋と眠つている顔の一角から、保守党の隅々まで睨んでいるといわれる父親の大臣にも、わからない。

だが、こうしているところを見ると、なりは大きいが無邪気そのもので、女学生のように結び下げにした、尾筒型の髪を撫でてやりたくなる。

「ブブブブブンブン、ブブン、ブブンブブンブンブン……」

コッコッ……コッコッ……誰か、さつきから、扉の一枚板の扉を叩いている。

「ブブブブブンブン、ブブン……誰？」真規はやっと気がついて、扉の方をふり返った。
「わたくし」と、室外の声がかすかに、「お届け物ですよ、お嬢さん」
「なんだ、婆やか……お入りよ」
真規の母親の三渡夫人が亡くなる前から、この家にいる老女中の秋が、リボンをかけた四角い包みをかかえて、重い扉の蔭から顔を出す。
「なに？　プレゼントね？　どこから？」
「それがね、お嬢さん。何もいわずに、おいて行っちまったんでございますよ、その使いの人……」
「誰が持って来たの？　デパートのメッセンジャーと違うの？」
「あまり見かけない男でしたよ。工員さんか何かみたいな……それに、これ、クリスマスの贈物にしては、包装がぞんざいでございますね」
「あ、わかったわ、婆や……きっと、守男さんからよ。あの人から、まだプレゼントが来てないもの。守男さんは凝り屋だから、何か奇抜なことを考えついたのに違いないわ。こっちへ頂戴」
「でも、どうでございましょうね？」と、婆やのお秋さんは、不安そうに渡し渋った。

「使いの男は、これ、旦那さまへとも、お嬢さんへとも、申しませんでしたよ」
「バカね、婆やは」と、真規は吹き出した。「パパにクリスマス・プレゼントを送つて来る人があつて？　しかも、その箱、桃色のリボンがかけてあるじやない。パパは去年、還暦のお祝いをしたのよ」
だが、きれいな喉くびを仰のかせて、ケラケラ笑つている真規を、お秋さんはむずかしい顔で見つめた。
「でもね、お嬢さん。お父さまの政党では、内紛というんですか、大変なごたごたが持ちあがつてるそうじやございませんの？」
「そうよ。執行部が議会の運営を間違えたつて、反主流派が総裁に責任を取れつていつてるのよ。それが、どうしたつていうの？」
「ですから、お父さまはこういう際に、たいそう圧えになる方なんでございましよう？若しお父さまがおいでにならなかつたらと、考える人もあるのじやございませんか？　こんな気違いじみたご時勢では、どんな飛んでもないことを考え出す者が、ないとは申せませんからね」
「まア。婆やはいつたい、何を考えてるのよ？」

「若しも、若しもですよ、お嬢さん。お父さまと反対派の人が、クリスマスの贈物らしい恰好にして、若しも変な物を……」
「変な物って、なあに？」
「たとえば、時限爆弾ですとか……」
「まア面白い。それじや婆やは、この中に時限爆弾が入つてるつていうの？」真規は手を拍つて飛びあがると、ケラケラ笑い出しながら、いきなりお秋さんの手から、贈物の包みを引つたくつた。
「い、いけませんよ、お嬢さん！」
「大丈夫だつたら、婆や。面白いな。誰かがパパを殺そうと思つて、爆弾を送つて来るなんて。あたし、あけてみるわ。あけた拍子に、ドカンと来るかしら」
「だ、だめですよ、お嬢さん」
秋が真青になつて、取戻そうとする手を、すりぬけて、真規は包みを頭の上にさしあげると、応接間の中を駈け廻つた。
「ドカーン、ドカーン、ドカーン」
「やめて下さい、お嬢さん、やめて。後生ですから……」

息を切らして追いすがるのを、すり抜けすり抜け、けたたましい笑い声を残して、次の小部屋におどりこむと、中からガチャリと掛金をかけた。秋はフーフーいいながら、扉を叩いている。ドンドンドンドン……

「だめですつたら、お嬢さん。いい子だから、戸をお開けになつて……」

真規は小部屋の床を踏み鳴らしながら、扉にむかつて、叫んだ。

「そら、婆や。真規、いま包みを解いたわよ……中からヘンな木の箱が出て来たわよ。そら、そら、いま箱の蓋をとるわよ。逃げるなら、いまのうちよ。ドドドドドドーン」

耳をすますと、絨氈の上に鈍い響を立てて、むこうの出口へ応接間を突つ切つて行く、秋の足音が遠ざかる。真規はいたずらそうな忍び笑いを洩らしながら、小部屋の中を見渡した。そこには友達や芸能界や、各方面から彼女に送られたクリスマス・プレゼントの包みが、もうかなり積みあげてある。

真規は抱えていた箱包みに眼を落とすと、顔をしかめて、窓の下の小卓にそれを置いた。彼女のパパを狙う政敵が、ほんとうにいるのかしら？　ちよつと真面目な顔つきで考えこむ。と、その包みがコトリと動いた。

真規はぎよッとして、眼をこらす。包みはひとりでに動いたのだ。爆弾ではないらしい

が、何だろう？　中に生き物が入つているのだろうか？　そうだわ、きつと。暗殺に使う動物つて何だろう？　蝮？　ハブ？　コブラ？　それとも毒蜘蛛？

「面白いわ」

真規の眼が、きッと坐つて、唇の一角から可愛い舌の先が突き出る。包みをむすんだ桃色のリボンに指を伸ばしかけて、また引つこめた。それから、そーつと包みを取りあげると、小部屋を脱け出し、忍び足で応接間を通りぬけ、廊下を小走りに走つて階段を駈けあがると、彼女の部屋に駈けこんだ。

ウインザー風の蝶型卓の上に包みをそッと置くと、三面鏡の上に投げ出してあつた革手袋を取つて、両手にはめる。慎重に鋏でリボンを斬りはらつて、包み紙をとりのけると、中から出て来たのは、あまり小綺麗とはいえない木箱で、薬品の荷作り箱らしい。蓋を取つてみて、真規は眼をみはつた。

「まあッ」

濡れた可愛らしい両の眼が、彼女を見つめている。両耳をピンと立てた小犬の首が、そこから、にゆつと突き出たのだ。しかも、真規が生れてからまだ一度も見たことのない、罌粟の花のように真赤な毛並の犬だつた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton